

2015年4月5日 イースター礼拝メッセージ

聖書：ヨハネの福音書 20章 24～31節

説教：私の主。私の神

1 自分の目で確認するまでは信じない

イエス・キリストが十字架につけられたのは金曜日でした。そのなきがらが葬られたのはその日の夕方。時間がないので応急処置をして葬るしかありません。次の日の土曜日は安息日ですから仕事をしてはいけないと教えられておりました。それで残りの作業は土曜日をはさんで日曜日にすることにします。日曜日の朝、マリアという女性は、主のなきがらをきちんと葬るために墓に向かったのですが、墓の中をのぞいてみるとそこは空っぽ。そこへ背中から声がします。振り向いて見るとそこによみがえられたイエスが立っておられました。マリアはこのことを知らせるために弟子たちの所に走ります。

その頃、弟子たちはテロリストの疑いをかけられ、見つければ殺される可能性がありますから、鍵をかけてひっそりと隠れています。そこへマリアが息を切らしてイエスのことを報告する。でも弟子たちは誰も信じません。ところがその日の夕方、主は弟子たちの所に主が現れてくださり、主が死からよみがえられたのだと信じるようになります。

ところが、トマスという人はたまたま何かの用事があってその場にはいません。帰って来てみると、弟子たちは興奮して跳んだりはねたり叫んだりしている。「いったいこの騒ぎはなにか」と聞けば、「主がよみがえられたのだ」とみなが口々に言う。

こんな時皆さんならどうするでしょう。相手が興奮し、騒げば騒ぐほど、こちらは妙に冷静になります。どうせ集団催眠のようなも

のにでもかかり、ありもしないことを見たと言って騒いでいる、そうに違いないと思う。そこでトマスはこう言うのです。25節。「私は、その手の釘の跡を見、私の指を釘の所に差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」

聖書が書かれた当時は科学も発達していなかったので、迷信やありもしないことでも人々は簡単に信じたのだろう。死んだ者が生き返るといふ話なんて頭がどうかしている。そんなふうを考える方がいます。無理ありません。私もかつてそう思っていました。

でもトマスを見ると、決してそういうことではなかったとわかります。彼は、ほかの人がなんと云おうとも、全部自分で確認するまでは信じない。そう宣言した。これはまさに今で言う科学者の態度です。昨年の今頃でしたが、STAP(スタッフ)細胞は本当にあるのかなのか、大騒ぎになりました。いくら本人が「スタッフ細胞はあります」と言っても、ほかの人が実験をしてみても再現できないのなら、それはやっぱり「なかった」という結論になります。それが科学の方法です。トマスは、この科学の方法をとり、自分の目と指で実際に確認するまでは信じないと宣言しました。

2 「見ずに信じる者は幸いです。」

そのトマスはどうなったか。一週間経った次の日曜日、トマスの前にイエスが現れてくださり、このように語りかけます。「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。

手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

明らかに主は、トマスが一週間前にほかの弟子たちの前で語っていたことばをご存じです。イエスのことばを聞いたトマスはどうしたか。ことばが出ないと言うのはこのことです。ただどの奥から絞り出すようにこうしか言えない。「私の主。私の神。」実際に、指を釘の所に入れたり、手を脇腹に差し入れたのではありません。もうそんなことをしなくても、主がよみがえられたことが一瞬にしてわかりました。

続けて主は言われます。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」トマスは、主が十字架で受けられた傷を自分の目と手で確認するまでは絶対に信じないと言いました。イエスはこれに対し、「そんな頑なな心にならないで、見ないで信じる者になりなさい」と、トマスをしかっているように聞こえます。もしそうであるなら、私たちにもイエスは、「よみがえられたイエスを見ないで、信じる人になりましょう」、そう語っていることになります。確かによみがえられたイエスに出会うことはありませんから、そうとも言えます。しかしそれだけなのか。もう少し深く考えたいと思います。

トマス以外のほかの弟子たちはどうだったのでしょうか。彼らは見ないで信じたのか。そうではありません。マリヤは墓の前で泣いていたときに、後ろを振り向き、復活された主の姿を見ました。それで信じました。ほかの弟子たちも、20節に、「主を見て喜んだ」とある。聖書をよく読むと、トマスだけではなく、マリヤもほかの弟子たちもよみがえら

れた主を見て信じていました。ということは、29節のイエスのことばはどんな意味になるのか。イエスの最も身近にいた弟子たちは、主を見て信じましたが、私たちはよみがえられた主を直接に見ることは確かにありません。そういう意味では「幸いな者」と言うことになります。

3 よみがえられた主のみからだにある傷

1) 傷を与えたのは誰か

でもそれで終わりなのか。私たちは、まったく主を見ることはないのでしょうか。そのことを考えるために、ひとつの質問をします。主は弟子たちに何を見せたのでしょうか。よみがえられたご自分のからだを見せています。そのとおり。でもよく読むと20節にこうある。「こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。」イエスご自身自ら弟子たちに対して積極的に、手の中の釘の跡、わき腹にある切り傷を見せています。

トマスも同じです。27節。「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。」見せているのは、十字架で受けられた生々しい傷跡です。なぜわざわざ見せるのでしょうか。イエスは少し意地悪なのか。もちろんそうではない。

主の御手の中に釘の跡、わき腹にあるぐっさりといぐられた切り傷。その傷をつけたのは誰か。直接にはローマ兵です。では誰が十字架につけるように命じたのか。ポンテオピラト総督です。では誰が総督に訴えたのか。祭司長です。では、裁判の席でイエスを十字架につけると叫んだのは誰か。群衆です。そのとき弟子たちはどこにいたか。みんな逃げ隠れてしまった。

トマスは最初、「傷を見るまでは信じないぞ」と息巻いていました。まるで科学者が顕微鏡をのぞくように、物事を自分から切り離して、客観的にそして冷静に観察し判断しようと考えていました。

ところが、主の御手とわき腹にある傷を見た瞬間、自分が恥ずかしくなりました。主の御手を十字架に釘打ったのは自分だったとすぐに感じました。言い訳も何もできない。自分の罪が鮮やかに浮かび上がり、心が刺されました。悲しくなりました。

でも、手とわき腹を差し出しておられる主の御顔を見たとき、主はこんな私をも心から喜んで受け入れ、迎えて下さっていることがわかりました。悲しいけれど嬉しい、心が痛いけれど喜びが満ちてくる。もうなにがなんだかわからなくなり、ことばが出ない。「私の主。私の神」と言うのが精一杯。

2) 傷はどこにあるのか

私たちもトマスと同じです。主の御手に刻まれた釘の跡、わき腹に刻まれた傷跡を差し出しているのですから、私たちも見ることになります。なぜそんな恐ろしいものを見なければならぬのでしょうか。「見ずに信じる者は幸いです」と言っているのだから、見なくても信じるだけでよいはずだ。そう思うのでしょうか。

主は、私たちとどこで関係を結ぼうとしているのですか。聖書をよく見てください。ただ一つしかない。主のみからだに刻まれた手の傷、わき腹の傷。「この傷がある以上、主であるわたしとあなたとは絶対に関係が切れることはない。」そのような印としてくださいました。

そんな大切な印です。見ないで済ます訳に

はいきません。でも、どのようにしたら見えるのでしょうか。どこを見たらよいのでしょうか。主の傷はどこに刻まれているのですか。どこをさがしたらあるのですか。外側ではありません。私たちの内側に刻まれています。隠れたところに刻まれた痛々しい傷があります。目をそむけてきました。でも、そこに主がおられます。私たちの中にある傷を主と一緒に受けられました。そのところにたたずんでおられる主を見たとき、私たちは声が出なくなります。それでもやっと出て来ることばは、「あなたは、私の主。私の神。」

よみがえられた主が私たちの奥深いところにある、痛みと傷を負っておられます。私たちはそこで、主とお会いすることになります。